

# タイを流れる欧米宗教学の微風 ——サーサナー（宗教）と Religion をめぐるタイ宗教学の模索——

矢野 秀武

## 1. はじめに

ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムといった東南アジア大陸部では、仏教徒の人口数が各国の第1位を占めている。ベトナムでは中国系の大乗仏教の影響が強いが、その他の地域ではスリランカ系の上座仏教の影響が強い。本稿で取り上げるタイの場合、9割以上の人口が仏教徒であり、宗教人口数第2位のムスリムを大きく引き離している。

このような状況であるため、タイの宗教に関する研究は上座仏教に関するものが多くを占める。しかし、あるいはそれゆえと言うべきか、宗教学という分野での研究はあまり目にするのがない。また少数派である宗教学関連の研究（比較宗教や宗教研究など）は、欧米の宗教学とのつながりも希薄である。それゆえ独自の様相を呈してもいる。本稿では、そのような地域性を帯びた宗教学関連の研究について、ラフスケッチを行うことを目的とする。

なお本稿は文部科学省の科学研究費補助金「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」（基盤研究B 課題番号 22320016）の成果の一部として記されたものである<sup>1</sup>。本稿を含む科研報告書には他の多くの国の宗教学の変遷が記されている。このような研究の土台となったのが、Gregory D. Alles ed., *Religious Studies*. Routledge, London and New York, 2007.である。この書籍には世界の様々な国や地域における宗教学関連研究の歴史や現状について包括的な情報が記されている。しかしいくつかの問題点もある。例えば、この書の中の東南アジアの論考では、東南アジア 10 カ国（東チモールは入っていない）における宗教研究関連施設が調査されているにも関わらず、比較的詳細な内容が書かれているのは、タイで2施設、カンボジアで1施設、シンガポールで1施設のみにすぎない<sup>2</sup>。しかも、学部学科の概要について簡単に触れている程度である。これはネット情報も含め現地語での調査が十分に行われていないことが原因と考えられる。もっとも、国ごとに言語や外部社会への情報開示度が異なる東南アジアの状況を鑑みれば、いたしかたない面もある。

本稿でも東南アジアすべての国について言及することはできず、タイだけをとりあげている。しかし現地語情報をもとにインターネットや書籍を通じての文献調査を行うことで、先述の書籍よりは、より深い内容を提示しているし、東南アジアの他の国々における宗教研究の姿を類推するための、情報を提供できるとも考えている。以下、本論に入る前に、本稿の構成と概要を述べておきたい。

まず、研究・教育機関の中に宗教学関連の研究がどのように制度化されていったのか、その歴史のアウトラインを描く。19世紀後半に比較宗教について極めて鋭敏な対応をとっていたラーマ4世王の学習状況から始まり、植民地に派遣された欧米人研究者とタイ人研究者の沙龙的な研究の場の形成、そして国民国家内のタイ人研究組織の制度化を経て、大学での制度化に至るといった変遷を取り上げる。また大学での宗教学関連の研究における制度化状況については、その中心が、仏教学から人文学へ、さらに社会科学へ、そしてグローバル化状況の対応へと推移している点が見て取れる。また欧米の宗教学との接点の希薄さと、逆にインドの大学とのつながりな

ども見えてくる。

次いで、これらの歴史過程の中で「宗教」（英語の religion、タイ語のサーサナー sasana）という用語がどのように定義されてきたのかを、宗教学関連の研究に関する古典的教科書を中心に取り上げる。そこでは、religion とサーサナーは、それぞれおよそ3通りの意味合いを持ち、それらが文脈により組み合わせられて使用されていることが見えてくる。この複雑な状況は、欧米の宗教学理論と宗教の定義があまり取り入れられていない事と、日本の様に「宗教」という新語ではなく、以前から使用されてきたサーサナーという用語を religion の訳語とする事によって引き起こされたものと言えよう。また、サーサナーは中立的な概念ではなく、一方で肯定的な価値づけをされた概念であり、他方でより低位の準宗教もしくは世俗的な見解や主義という意味合いを持つラッティ (latthi) との差異において定められるということを論じる。

## 2. 宗教学関連の研究における制度化過程

### 2-1 王室を基盤とした宗教研究 1850年代から1930年代まで

本節では、タイにおける宗教学関連の研究がどのような段階を経て、大学における研究・教育として制度化されてきたのか、さらに大学内での位置づけにどのような変化があったのか、その概略を提示する。

タイにおける宗教学関連研究の歴史について、筆者はこれまでそのような研究を目にしたことがない。学術団体の形成という点からいえば、後述の1904年設立のサイアム・ソサイエティが嚆矢ということになるかもしれないが、筆者としては、歴代国王の書簡や書籍も宗教研究の流れに影響を与えている点で、制度化前史として取り上げておきたい。なぜならサイアム・ソサイエティの設立には王族が深く関わってきた経緯があり、加えて国王は近代の学知を最も早く体系的に学んだ人物であり、タイの仏教界においても重要な役割を果たしてきたからである。そこでまずは、近代化の黎明期に当たる、親王時代のラーマ4世王の出来事から、記述を始めてみたい<sup>3</sup>。

ラーマ4世王（1804～68年。在位1851～68年）の親王時代は、西洋列強の進出と言うタイの歴史の大きな転換期であった。タイ周辺の上座仏教圏を見渡してみても、1815年にはイギリス支配下のスリランカで王制が廃止され、1824年には隣国ビルマが第一次英緬戦争に突入している、そういった時代であった。タイも1826年には、欧米諸国との初の二国間条約であるバーネイ条約をイギリスとの間に締結している。そして1833年からタイへのプロテスタンの宣教が本格化し始めている。ちなみにスリランカにおいて、キリスト教宣教師と上座仏教僧侶の間で行われた有名な教義論争であるパーナドゥラー論争は、ラーマ4世没後5年後の1873年の出来事であった。

このような状況下において27年間という長きにわたる出家生活を続けていたモンクット親王（後のラーマ4世王）は、三蔵經典に基づく教えと実践を重視し、近代的な宇宙観と齟齬する王室系バラモン教や民間信仰の宇宙観を排除するといった、仏教改革を行い、1836年にはタンマユット派という新派を設立している。またモンクット親王は当時、カトリック神父と親交があり、他方でプロテスタント宣教師からの度重なる布教を受けてもいた。そこで親王はキリスト教と西洋近代の学問を熱心に学び始めたのである<sup>4</sup>。その内容の一部については、次節で取り上げる事とするが、簡潔に言えば、自身をそして自国を西洋列強から防御するために、様々な宗教について

の知識が必要とされたのであった。意識的に他宗教の知識を学ぶという点では、宗教研究の始まりと言えよう。ただそれは、言わば果たし合いのための実践的な宗教研究であった。

この文化的防御網は、続くラーマ5世王（在位 1868-1910年）の時代に、僧侶の世界と在家の世界の双方において制度化されていった。僧侶の世界においては、全国規模のサンガ組織が構築され、また僧侶が学ぶ教えも標準化されていった。前者は国家主導で行われ 1902年に法制化され、後者はラーマ4世王の王子でありサンガ統治の重鎮となるワチラヤーン親王（1860～1921年）を中心に進められていった<sup>5</sup>。

一方、在家者の世界では、親王時代のラーマ6世王やラーマ4世王の王子ダムロン親王（1862～1943年）等が中心となり、タイ人研究者と外国人研究者からなるタイ国内初の学術団体サイアム・ソサイエティ（The Siam Society under Royal Patronage）が、1904年に設立されている。この団体は、歴史学・考古学・碑文学を中心に、その他人文系の学問や自然科学なども加わった、今日まで続く研究団体である。メンバーの中には、植民地とその周辺地域の歴史・文化の研究を行っていたフランス極東学院（1898年に前身が当時のサイゴンに設立され、翌年にハノイに移転しフランス極東学院となる）に所属する研究者もいた。サイアム・ソサイエティでは、人文系と自然科学系のジャーナルを発行しており、人文系ジャーナルの常連寄稿者としては、ダムロン親王、プレイヤー・アヌマーンラーチャトン（1969年に平民初の同会会長となるタイ人文学の先駆的研究者）、G・セデス（フランス極東学院の研究者から後にタイ国立図書館長となった東南アジア古代史の権威）、O・フランクフューター（ドイツのインド学研究者）などがいた<sup>6</sup>。ただしサイアム・ソサイエティにおいて、宗教学的と言える研究がどの程度行われていたのかは定かでない。しかしこの団体がタイの学問全体の礎となった点、さらに後に『比較宗教』という古典的著作を執筆するプレイヤー・アヌマーンラーチャトンが、当該ジャーナルの常連寄稿者であった点などから、この団体の設立をタイの宗教学関連研究の制度化前史の一部として位置づけておきたい。

その後ラーマ6世王（在位 1910-1925年）の時代には、とくに制度化の進展は見られないが、若い時代からイギリスに留学していたラーマ6世王の執筆した書籍には、仏教を宗教一般の中に位置づけて論じる語り口が、頻繁に見られると指摘されている<sup>7</sup>。これは後の比較宗教や宗教概念の定義に至る流れの端緒とも言えよう。

7世王時代（在位 1925～1935年）は、タイ人研究者のみの学術組織が形成され、よりナショナル化した宗教の語り方が広まる時代であった。まず 1926年に、タイ国内における各学問分野の著名な研究者によって構成される王立学士会議（rachabanditsapa）という政府内の独立機関が設置された。1932年の立憲革命の影響もあり、1933年に改組され王立学士院（rachabanditsathan）となる<sup>8</sup>。この組織は、タイ国内の学術交流と支援を目的としており、百科事典やタイ語辞典なども出版している。特に王立学士院版のタイ語辞典の表記と意味は言わば公定用語とされる語句であり、（本稿で後に触れるが）タイで多く参照される宗教の定義もこの事典に含まれている。なお現在の王立学士院は、人文・社会科学、自然科学、言語・芸術の3領域（65分野）に区分されており、このうち人文・社会科学の領域に、哲学部門・宗教分野（wicha sasana）が設置されている。

そして 1929年に、この王立学士院（当時は王立学士会議）から恩賜賞を与えられた著作が、クン・ウィチットマートラー（Khun Wicitmatra）による『タイの基盤（ラック・タイ Lak Thai）』

である。この書籍は、民族愛・仏教信仰・国王への忠誠という3つの価値を結び付けた、ラック・タイを学術的に論じたもので、その内容は現在でもタイの国家イデオロギーとして重視されている。次節でも触れるが、この書で使用されているサーサナー(宗教)という用語は、様々な宗教を包括する宗教一般として示されるが、サーサナー論の中心は、バラモン教(サーサナー・プラーム)から仏教(プッタ・サーサナー)へと至る仏教史にある<sup>9</sup>。

## 2-2 仏教大学における宗教学関連講座の形成 1940年代

以上の様に、タイの宗教学関連研究の制度化前史は、言わば王室を中心としたものであり、タイおよび近隣諸国に在住していた植民地研究者など外国人研究者を取り込んだ学術制度化の一部として進展し、徐々に宗教研究の国民国家化した制度とそれに即した語り口を見つけていく過程であった。その後、第二次世界大戦後に再び大学が本格的に活動を始めると、前史の状況を引き継ぎながらも、さらに多様な宗教学関連研究のあり方とその制度化が展開することになる。

大学における宗教学関連の研究の端緒は、意外にも中心的な国立大学から発したものではなかった。それはタイ上座仏教の2つの宗派を基盤とした各仏教大学において、比較宗教の講座を担当した、2名の人物に始まるとされている。1人はタンマユット派のマハー・マクット仏教大学で教鞭をとったスチープ・ブンニャヌパーブ(Suchip Punnyanuphap 1917-2000年)、もう1人がマハーニカーイ派のマハー・チュラーロンコーン仏教大学の教員サティアン・パンタランシー(Sathian Phantharangi 1911-1991年)である。実際、近年のタイの比較宗教や宗教学の教科書では、この2人の書が古典的書籍として必ず参照されている。本稿でも次節において、彼らの宗教概念の定義について言及する<sup>10</sup>。

スチープが教鞭をとったマハー・マクット仏教大学は、1832年に設立されているが、大学として十分に機能を果たし始めるのは戦後からであり、スチープはその立役者の一人であった。彼の専門は仏教学であり三蔵経典について熟知しており、パーリ語国家試験においても最高段位を取得している。英語にも長けており僧侶時代には英語での説法も行なったと言われている<sup>11</sup>。スチープは1945年から比較宗教の講座を担当し、『比較宗教 (Sasana Priaphthiap)』(1961)、『宗教史 (Prawatthisat Sasana)』(1963)という書籍も執筆している。比較宗教の講座を担当するようになった経緯は不明だが、同じ時期にもう1つの仏教大学でも比較宗教の講座が設置されている点からして、当時、僧侶向け高等教育において他宗教を学ぶ必要性があったのであろう。

戦後の新制度発足当初における、マハー・マクット仏教大学の宗教研究や比較宗教に係る、講座編成やカリキュラムやスタッフなどについて、筆者は十分な資料を持ち合わせていない。代わりに参考までに2005年の状況を示しておく。学士課程では宗教・哲学部(Khana Sasana lae Prachaya)に、宗教学科(Phakwicha Sasanasat)があり、この学科の中に宗教・哲学コース(Sakhawicha Sasana lae Prachaya)と、比較宗教コース(Sakhawicha Sasana Priaphthiap)が設置されている。学科の教育目標として、世界の宗教の教えを正しく理解すること、諸宗教や哲学の異同を理解すること、他宗教や思想への寛容な態度の育成、宗教の教えを生活に活かすこと、研究の基礎を学ぶことなどが記されており、また宗教・哲学コースでは、異なる信仰や思想をもつ人々への伝道方法を学ぶこと、比較宗教コースでは他宗教との協同での社会貢献などが掲げられている<sup>12</sup>。

修士課程でも宗教学科はあるが、仏教学、仏教と哲学、社会学といったコースのみとなってい

る。また博士課程では同様に仏教学コースのみとなっている。

カリキュラムの詳細について述べることは紙幅の都合もありできないので、事例として比較宗教コース内の宗教学関連の科目のみ一覧を示しておく（一般教養科目や、仏教学専門科目、ゼミなどは除く。また全ての科目が毎年開講されているわけではない）<sup>13</sup>。

◆ 比較宗教科目（宗教史、宗教入門、原始宗教、バラモン・ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教とシク教、ゾロアスター教とユダヤ教、道教・儒教・神道、キリスト教、イスラーム教、女性と宗教、分析的比較宗教）

◆ 選択科目（宗教・文化とタイ社会、宗教儀礼、宗教の教え方、宗教と文化、宗教人類学、宗教心理学、宗教社会学、宗教と死、宗教瞑想、文明、宗教と平和、宗教と情報学、宗教布教、宗教とリーダーの役割、宗教と発展、仏教と科学、仏教と現代、研究方法、倫理学）

なお教員スタッフの経歴で特徴的なのは、僧侶教員と俗人教員ともにインド留学経験者が多い点である。宗教・哲学コースの専任教員5名のうち4名がインドのバナラシ・ヒンドゥー大学で修士号を取得している（残り1名はタイのマハー・チュラーロンコーン仏教大学）。比較宗教コースでは、5名の専任教員のうち2名がバナラシ・ヒンドゥー大学で博士号ないしは修士号を取得し、1名が同様にインドのマガダ大学で博士号を取得している（残り2名はタイ国内のマヒドン大学卒とマハー・マクット仏教大学卒）<sup>14</sup>。

出家者向けの仏教大学なので、仏教学と英語を学べるインドへの留学者が多いと思われるが、欧米の大学ではなくインドに留学すると言うのは、地理的・経済的な理由などもあるのだろう（ミャンマーの仏教大学においても、インド留学経験のある僧侶教師が多い）。実際、比較宗教についての教科書を執筆しているタイ人研究者の経歴を見てみると、僧侶でない場合でもインドで仏教学などを学んできている者が少なくない。ただし欧米への留学者も増えており、それにつれて学問系統の変化も生じていると思われる。ちなみに、インドへの留学はイスラーム研究やムスリムの留学者の間でも行なわれている<sup>15</sup>。

もう1人、第二次世界大戦後のタイの大学において、比較宗教研究の礎を築いたサティアン・パンタランシーは、戦前に日本の大谷大学に留学していた。タイに帰国後、マハー・チュラーロンコーン仏教大学で、1947年から比較宗教や大乘仏教などの講義を行い、『比較宗教』（1963）を著している。彼を通じて日本の宗教研究のあり方が（特に大乘仏教や新宗教への注目などが）、タイの学術状況に影響を及ぼしている可能性もあるかもしれない。サティアンは王立学士院の哲学部門・宗教分野（Wicha Sasana）初代の王立学士に選ばれ、その後1989年から1991年まで王立学士院の書記長を担っていた<sup>16</sup>。

マハー・チュラーロンコーン仏教大学の設立も1889年と古いが、先のマハー・マクット仏教大学と同様に戦後に大学としての活動を活発化させてきた。2007年のカリキュラムによれば、宗教学関連の講座を持っているのは、学士課程では仏教学部（Khana Phutthasat）の宗教・哲学科（Phakwicha Sasana lae Prachaya）の宗教科コース（Sakhawicha Sasana）のみであり、修士課程では仏教学部の比較宗教科（Sakhawicha Sasana Priapthiap）のみである。博士課程には宗教学関連のコースは無い。

教育目的も、先述の仏教大学と似通っている。諸宗教の特徴の理解、宗教の重要性の理解、広い視野と論理性を持ち平和を目指して宗教に関する議論を行うことなどが挙げられている。修士

課程の理念では、宗教の重要性や宗教と社会の関連についての理解だけではなく、布教と宗教間理解に役立つ学習という点が掲げられている。学士課程の宗教関連科目については、下記の様になっている（一般教養科目や、仏教学専門科目、ゼミなどは除く。また全ての科目が毎年開講されているわけではない）<sup>17</sup>。

- ◆ 応用仏教科目（仏教とバラモン・ヒンドゥー教、仏教とキリスト教、仏教とイスラーム教、仏教と儒教、仏教と新宗教）
- ◆ その他専門科目・必修（上座仏教、大乘仏教、キリスト教、イスラーム教、バラモン・ヒンドゥー教、新宗教、宗教芸術、道教と儒教、比較宗教、古代宗教、自由研究）
- ◆ その他専門科目・選択（その他の宗教、宗教心理学、宗教と言語など 17 科目）

## 2-3 一般国立大学の人文系における宗教学関連科目

### 1950年代から1960年代前半

上記の様にタイの大学における宗教学関連講座の制度化は、僧侶向けの仏教大学で始まった。では一般在家者向けの大学ではどうだったのだろうか。実は、進学校の上位にあり著名な研究者も多い有名国立大学には、宗教学関連講座がないのである。例えば現在の学部学科構成でみると、タイ初の総合大学であるチュラーロンコーン大学（1917年創立）には、学士・修士の文学部哲学科にパーリ語・サンスクリット語コースがあり、また哲学コースは博士課程まで設置されているが、宗教学関連の学問を専門に学ぶ学科やコースは無い。同様にタイで2番目に古いタマサート大学（1934年創立）では、学士課程の教養部哲学科、修士課程の哲学科・仏教学コースがあるだけとなっている。またタイ北部の中心的総合大学であるチェンマイ大学（1964年創立）も同様であり、修士課程の文学部哲学科に仏教学コースがあるのみである。ちなみにタイ東北部の中心的大学であるコンケン大学（1964年創立）にも、宗教学関連の学部学科は無い。

もちろんこれらの大学において、宗教学関連の科目が一切ないというわけではない。教養科目や社会学や文化人類学系の学部・学科等で、関連科目があるだろう。ただ、宗教学や宗教研究をメインとした学部・学科が開設されていないのである。おそらく何らかの政策的意図があり、宗教学関連の制度化は、当初、一般の国立大学ではなく、僧侶向けの仏教大学を中心に開設されたのであろう。その際に宗教学は、宗教の布教や実践、宗教間の対話と関わる、価値的コミットを伴った臨床的学問と捉えられていたのかもしれない。

ただし、一般の国立大学においてなされていた宗教学関連の授業科目には、比較宗教や宗教学の礎となる書物を記した2名の人物が関わっていたことが分かっている。それはプラヤー・アヌマーンラーチャトン (Praya Anumanrachathon 1888~1869年) と、セーン・ジャンタガーム (Saeng Canthagam 1927年~) である。

プラヤー・アヌマーンラーチャトンは、先述の様にサイアム・ソサイエティの古参メンバーであり会長も務め、さらには王立学士院の会長も務めた人物である。タイの人文学の先駆的研究者であり、タイ民俗学の父とも呼ばれ、また文芸作品も多い。多彩な才能を持った人物である。幼少期より学問に秀でており、英語で学習するアサンプション校に入学するが学費を工面できずに中等4年で中退し、役所に勤めながら英語を学び、翻訳なども手掛けた。後にダムロン親王に見出され、学問の世界に本格的に関わることとなった<sup>18</sup>。

プラーヤー・アヌマーンラーチャトンは、チューラーロンコーン大学特別教授となり、語源学や比較文学、そして比較宗教などを講義している。そして1959年に『比較宗教 (Sasana priapthiap)』を著し、同年に始まるタマサート大学の比較宗教の授業を担当し、この書籍を教材としている<sup>19</sup>。この書籍も、後の宗教学関連の教科書では必ず参考文献に挙がっている古典となっている（この書籍については、次節で再度言及する）。

他方のセーン・チャンタガームは、ランナータイ（タイ北部の伝統的な呼称）随一の仏教学者とも呼ばれた人物で、新制のマハー・マクット仏教大学の第一期生であった。師は先述のスチープ・ブンニャヌパーブである<sup>20</sup>。セーンは、僧侶時代にスリランカやインド・ミャンマー・マレーシアなどを散策するなど近隣諸国の見聞を深め、さらにロンドンで英語を学び、ミシガン大学に移って言語学の修士号を取得している。その後1964年からチェンマイ大学で「宗教科 (Wicha Sasana)」の授業を担当し、これをもとに1986年に『宗教学 (Sasanasat)』を著している。次節でも触れるが、この書籍は、比較宗教や宗教史と題する他の書籍と異なり、宗教別の解説ではなく、宗教の本質や要素、発生と発展の過程、特徴による分類などといった形で、諸宗教の異同を整理している。

このように、戦後しばらくの間、主要な国立大学では宗教学関連の講座はなかったが、その一部で比較宗教や宗教学といった授業科目が開設されていた。またこれらの科目に関わった人物はタイの宗教学的研究の土台となる業績を記しているのである。ただし、いずれの人物も（そして後述のように書籍内容も）、欧米の宗教学からの直接的また体系的な影響を受けていない。その意味では、これらタイの宗教学関連の書籍は、タイ独自の宗教学の現れと言えよう。

## 2-4 国立大学における宗教科設置と社会科学との接合

### 1960年代後半から1970年代

1960年代後半になると、国立大学の中に宗教学関連の講座が設置されるようになる。タイで3番目に古い、農業系の研究で著名なカセサート大学（1943年創立）に、1966年から人文学部の哲学・宗教学科 (Phakwicha Prachaya lae Sasana) が学士・修士レベルで開設されている。開設の経緯などは不明である。なお、2012年の学部カリキュラムを見てみると、宗教関連の必修科目として、宗教入門、上座仏教、仏教と環境、キリスト教、イスラーム教、ヒンドゥー教、大乘仏教、タイ仏教、仏教瞑想、比較宗教などがあり、選択科目には、中国思想、大乘仏教思想、宗教哲学、タイ文学と思想、宗教史、宗教体験、タイのキリスト教、タイのイスラーム教などがある<sup>21</sup>。また2010年の修士課程カリキュラムを見てみると、宗教科の授業科目には、聖典研究や比較宗教という科目だけではなく、キリスト教と社会開発の分析、バラモン・ヒンドゥー教と社会開発の分析、イスラーム教と社会開発の分析、仏教的アプローチによる政治学分析など、社会科学的傾向を持つ科目が多い点が特徴的である<sup>22</sup>。

その後同様の傾向が新設の大学で見られるようになる。例えば、タイ南部の中心的大学であるソクラーナカリン大学（1968年創立）のパッタニー県のキャンパスには、人文・社会科学部に哲学・宗教科 (Phakwicha Prachaya lae Sasana) が設置されている<sup>23</sup>。

さらに、地方のサテライト校の多いマヒドン大学（1969年）にも、1974年に社会科学・人文学部が設置され、その修士課程には比較宗教コース (Sakhawhicha Sasana Priapthiap) が設けられ

ている。1979年には、サティアンポン・ワンナポック (Satianphong Wannapok ケンブリッジ大学に留学しパーリ語・サンスクリット語研究の修士号を取得した、タイの著名な仏教学者) が、比較宗教の担当となっている<sup>24</sup>。当コースの1999年度版カリキュラムの理念には、「社会学・人類学・心理学や哲学など今日の学問の知見に基づいた批判的な議論」といった点が謳われており<sup>25</sup>、人文学以外特に社会科学的な宗教研究の広がりが見て取れる。

以上のように1960年後半以降になってようやく、一般の国立大学においても宗教学関連の学部・学科が設置されるようになった。ただし、その多くは、社会科学とのつながりを持った教育・研究になっているようである。そこにはこの時代の影響が見て取れる。つまり戦後になって日本を含むアジア地域では、社会学や人類学といった新たな学問の影響力が増しており、1960年代からはタイでフィールド調査を行う欧米系の人類学者や地域研究者も増えていったという状況がある。加えて、欧米の研究者が現地調査を経て博士の学位を取得後に、欧米諸国の大学で教員となり、タイからの留学生を受け入れ、そのタイ人留学生が帰国後に本国で教鞭を取るというサイクルも形成されていったのではないかと推察される。

## 2-5 脱仏教化・グローバル化・学際化 1980年代以降

1980年代以降、タイの大学における宗教学関連の学部・学科の設立において、脱仏教化、グローバル化、学際化といった新たな変化がみられるようになった。とりわけ顕著なのは、イスラーム教あるいはキリスト教の研究を中心に据えた大学や学部学科が設立された点である。

まざイスラーム系の研究施設としては、タイ南部パッタニー県にあるソクラーナカリン大学イスラーム研究学部 (Withayalai Islam Suksa) があげられる。この学部は1982年に、先述のソクラーナカリン大学人文・社会科学部の哲学・宗教科から独立したものであり、イスラーム教学科、イスラーム教法学科、中東学科、イスラーム教経営管理学科、イスラーム教教育学科といった5つの学科で構成されている<sup>26</sup>。

その後、1998年には、私立大学のヤラー・イスラーム大学という総合大学が、タイ南部のヤラー県に設立されている。サウジアラビアの大学に留学していたタイ人のムスリムが、サウジアラビアのイスラーム発展銀行の支援を受けて設立した大学である。宗教学関連の学部学科は見当たらないようであるが、学士課程の人文学部にはイスラーム法学科やイスラーム歴史文明学科などがある<sup>27</sup>。

キリスト教系の大学もこの時代に認可され始めた。1984年には、タイ初の私立大学パーヤップ大学が認可されている。この大学の前身は1974年に創設されたカレッジであり、タイのキリスト教団体が母体となっている。現在、修士課程のみのコースでキリスト教のコースが設置されているが、宗教学関連の科目はない<sup>28</sup>。

さらにもう1つキリスト教系の私立大学が1990年に認可されている。それは1969年創立のアサンブション・カレッジを前身とする、アサンブション大学である。この大学は、フランスに始まる聖ガブリエル修道院が運営母体となっている。学士課程では宗教学関連のコースはないが、哲学・宗教科 (Graduate School of Philosophy and Religion) の修士課程・博士課程において、それぞれ哲学 (Philosophy) と宗教学 (Religious Studies) のコースが設置されている。哲学コースは1997年から、宗教学コースは2001年から開設されている。



アサンプション大学の宗教学コースで興味深いのは、宗教や宗教学的研究の意味、そして科目等が欧米の宗教学をどこでも感じさせる点である。例えば、学科の理念として「精神の自由、知の自由、相互理解と平和共存を促進するための、地域の指導的學校となることを目指す」といった事が掲げられ、学科の役割としても「知の自由・精神の自由の下での哲学・宗教研究」といった点が謳われている点である。他の大学の宗教学関連講座の理念に、宗教間の理解や他宗教への寛容といったことが掲げられていることはあるが、「知の自由・精神の自由」といった点を強調しているケースは見当たらない。また科目の内容も、各宗教伝統の思想、世界宗教、宗教間対話といったものだけでなく、宗教・ポストモダン思想・グローバル化、ナラティブ研究、宗教と科学、宗教言語、宗教と生活、神秘主義、現代倫理問題、といった科目もあり、欧米の宗教学研究との接点が他の大学よりも強いように思える。科目説明の中に、ミルチャ・エリアーデやピーター・バーガーといった著名な宗教学者や宗教社会学者の名前が掲げられていたのも、アサンプション大学の宗教学コースだけであった<sup>29</sup>。

さらに 1999 年には、先述のマヒドン大学社会科学・人文学部から、宗教研究部 (Witthayalai Sasana Suksa) が独立し、学士・修士・博士課程までそろった教育環境を整えている<sup>30</sup>。この機関設立の中心的人物は、イェール大学に留学し哲学の博士号を取得したピニット・ラタナクン (Phinit Ratanakun) である。彼は仏教と生命倫理を専門としており、マヒドン大学の宗教学部は、タイにおける宗教 (特に仏教) と生命倫理関係の研究の中心地の 1 つとなっている。

学部の理念には、宗教間の相互理解や平和の促進だけではなく、「グローバルな倫理的価値の育成」、「グローバル化、ジェンダー、新たな科学的発見、医療テクノロジーなどの現代の問題への取り組み」など<sup>31</sup>、グローバル化時代に対応し、またこれまでの学問分野を越えた教育・研究を進めている。機関名称に、宗教学 (サーサナ・サート sasanasat) ではなく宗教研究 (サーサナ・スクサー sasana suksa) が掲げられているのは、この学際性と関わりがあるかもしれない<sup>32</sup>。

## 2-6 宗教学関連研究の制度化とその特質

以上述べてきたように、第二次世界大戦後のタイにおける宗教学関連研究の制度化過程は、仏教学者を基盤とする仏教大学内での制度化に始まり、次いで国立大学における宗教学関連科目の個別導入の時期を経て、1960 年代後半から社会科学と接点を持った宗教学関連の学科の設立へと展開していった。さらに 1980 年代からは私立大学の認可にとともにイスラーム研究やキリスト教研究に特化した学部も設置されるようになり、またグローバル化時代と生命倫理に関わるテクノロジーの進展といった新たな社会的課題を中心に据えた宗教学関連研究の制度化も進んでいる。このように比較的明瞭な形で変化が現れている点からして、この変化は国の宗教政策や教育政策の変遷と結びついているのではないかと推察される。

これらの流れにおいて興味深い点は、欧米のいわゆる宗教学の影響がほとんど見られないこと、およびインドで仏教学を学び帰国する研究者の流れがあるということである。その背景には、地理的・経済的に有利でかつ英語も学べるインドへの留学という状況が考えられる。ただしインド経由で欧米の宗教学がタイに移入されたとまでは言えそうにない。またタイは、植民地インドの宗主国であったイギリスとのつながりも強かったのだが、イギリスの宗教学が大きな発展を見せるのは、ニニアン・スマートによるランカスターの宗教学の発展など 1960 年代末からであり<sup>33</sup>、

その後発性ゆえにタイへの影響力もあまりなかったと思われる。つまりタイの宗教学の制度化は、仏教学・社会科学・その他の学際的な研究といった学問の流れの中で、欧米宗教学の影響をあまり被らず、タイの歴史的・社会的課題に即して展開してきたと言えよう。

### 3. タイの宗教学関連テキストにおける「宗教」概念

次に、以上述べてきたタイの宗教学関連研究の制度化史の中で、古典として位置づけられている書籍（教科書）の内容を明らかにしていきたい。ただし本稿では、これらの書籍の中で、「宗教」に該当する用語がどのような背景のもとに定義され、どういった特徴を持っているのかについてのみ、取り上げることとする。具体的には、欧米宗教学理論の不在、「宗教」の定義を巡る混乱、宗教（サーサナー）の存在意義と準宗教的領域（ラッティ）との差異といった、3つの論点から、宗教学関連テキストにおける「宗教」概念の特色を論じる。

ここで主として取り上げる書籍は次のものである。

- ・ラーマ4世王『国王御親筆(プララーチャ・ハッタレーカー Praracha Hatthalaekha)』(1959)
- ・クン・ウィットマートラー『タイの基盤(ラック・タイ Lak Thai)』(1928)
- ・「宗教(サーサナー Sasana)」『王立学士院版 タイ語辞典』(1950)
- ・ルアン・ウィットワータカーン『普遍宗教(サーサナー・サーコーン Sasana Sakon) 第1巻』(1951)
- ・ブラヤー・アヌマーンラーチャトン『比較宗教(サーサナー・プリアップティアップ Sasana Priapthiap)』(1959)
- ・スチープ・ブンニャヌパーブ『宗教史(プラワッティサート・サーサナー Prawatthisat Sasana)』(1963)
- ・サティアン・パンタランシー『比較宗教(サーサナー・プリアップティアップ Sasana Priapthiap)』(1963)
- ・セーン・ジャンタガーム『宗教学(サーサナ・サート Sasanasat) The Science of Religion』(1988)

なお、以下の議論に置いて、「宗教」に該当する用語としてタイ語のサーサナー(sasana)と英語のreligionを使用し、できるだけ日本語の「宗教」という用語を使わないよう心がける(ただし書名や学問名称は除く)。なぜならば、以下に論じるのは、サーサナーとreligionのニュアンスの違いをめぐる多様な解釈のあり方についてであり、ここに日本語の「宗教」を無造作に使用してしまうと、さらなる混乱を招きかねないからである。

#### 3-1 欧米宗教学理論の不在

タイにおける宗教学関連の古典的書籍やテキストに目を通した際に、筆者がまず気がついたのは、欧米の宗教研究に言及がありながらも、欧米系の宗教学理論がほとんど取り上げられていない点である。理論だけではなく、著名な宗教学者の名前や文献などもほとんど取り上げられていないし、そのような理論が「宗教」概念の定義にも反映されていないのである。前節でも触れたことだが、欧米の宗教学はタイを素通りしてしまったようだ。

いくつかの事例を挙げてみよう。まず著名な文人・高級官僚であったルアン・ウィットワータ

タカーンによる『普遍宗教』（1951）では、そもそも参考文献が上がっておらず、宗教学者の名前も見られない<sup>34</sup>。プラヤー・アヌマーンラーチャトン『比較宗教』（1959）では、E・B・タイラーの『古代宗教』やJ・G・フレイザーの『金枝篇』が参考文献に挙がっており、原始的な宗教やアニミズムの説明などに参考とされている。それ以外にM・エリアーデの『比較宗教における型』などが参考文献に挙がっている他は、Brown, Lewis. *This Believing World*. (1926) や Carpenter, J. Estlin. *Comparative Religion* (H.U.L). (1910, London)など<sup>35</sup>、今日あまりなじみのない文献が掲げられるにとどまり、総じて宗教学理論の変遷などには言及がない<sup>36</sup>。

戦後に仏教大学の比較宗教講座の礎を築いたスチープとサティアンの著作でも同様である。スチープ『宗教史』（1963）では、英語の religion の定義の多様性を指摘する際に、イギリスの研究者 Robert E. Hume による *The World's Living Religion* という書籍からの参照として<sup>37</sup>、カントやマックス・ミュラーやウィリアム・ジェームスなど著名な哲学者や宗教学者の定義を提示している。また、宗教史のモデルとしてはロンドン大学の宗教史学者 E. O. James による地域別・教義別の説明モデルと、アメリカの Charles Samuel Braden による古代から現代といった時系列ベースで国別に説明を行うモデルを取り上げ、スチープとしては両者の長所を取って時系列と大陸別の説明を行うと述べている<sup>38</sup>。

他方のサティアン『比較宗教』（1963）では、西洋の religion の定義を Vergilius Ferm による *Encyclopedia of Religion* から引用し、同様に religion の4つの特質なるものを、Charles Samuel Braden による *The World's Religion* から引用している<sup>39</sup>。このように欧米の研究を参照しながら論を展開しているのだが、ここで引用された研究者は宗教学の巨匠でもないし、その書籍は古典に位置づけられているようなものでもない。筆者にとっても、これらの著者や書籍は馴染みのないものである<sup>40</sup>。

唯一の例外と言えるのが、セーン『宗教学』（1988）である。そこではドイツの著名な宗教学者グスタフ・メンシングの著作 *Structures and Patterns of Religion* の内容が、たびたび言及されているのである。その他にもE・B・タイラー、J・G・フレイザー、M・ミュラーに留まらず、W・ジェームス、E・デュルケム、M・ウェーバー、R・オットー、C・G・ユング、現代ではJ・ヒックなどについても、部分的にはあるが言及がなされている（筆者の見落としが無ければだが、エリアーデは言及されてない）。またこの書籍は1980年代後半の刊行と比較的新しい書籍であるためか、先述の書籍とは全く異なる記述方法を模索したものとなっている。その序文において示されているように、セーンが目指したのは、世界宗教や宗教史や比較宗教、あるいは宗教哲学や宗教心理学や宗教社会学などの個別研究を網羅し、宗教の本質、宗教と生活・社会、宗教体験、構成要素、発生と発展、種類といった点から体系的に整理した「宗教学 (Sasanat) Science of Religion」の構築であった<sup>41</sup>。

ただし、前節(2-3)で触れたセーンの経歴からもわかるように、欧米の宗教学研究を専門的に学んだ形跡は見られない。またメンシングを引用しているが、ドイツ語原本ではなく英語訳を参照している（しかもその英訳本は、1976年にインドのデリーで出版されたものである）。また、宗教学理論からの考察は十分なされていないようであり、超自然、聖性、究極性などから宗教を定義してきた宗教学でおなじみの理論概説なども見当たらない<sup>42</sup>。しかし逆に言えば、セーンの著作において、彼独自の、そしてタイの宗教的社会環境を加味した宗教学が、形成されている可

能性があるとも言えよう。

### 3-2 「宗教」の定義を巡る混乱

このように欧米の宗教学理論と、超自然・聖性・究極性など適用範囲の広い宗教の概念を取り込むことのなかったタイの宗教学関連の書籍では、次に示すように、「宗教」に相当する英語の religion とタイ語のサーサナーの意味の異同を巡って、ある時期からいささか錯綜した議論が生じることとなった。以下、いくつか事例を紹介し、筆者の視点からこれを整理してみたい。

まず先述のラーマ4世王がまだ親王かつタンマユット派僧侶の長であった1849年に、アメリカの知人に送った英語の書簡を見てみる。そこでは、未開人の迷信 (superstition of forest)、バラモン教の迷信 (superstition of Brahmines)、キリスト教 (Christianity)、仏教僧 (priest of Buddhist)、ユダヤ教 (Jewish system) などの語が使用されている事がわかる。またこれらを religion という一般用語の範疇に入れて論じ、加えて、世界の様々な religion には、人々を永遠の幸福に導く徳や善行や良心があると述べている。ただし、バラモン教の迷信性とともユダヤ教の迷信性を帯びたキリスト教も religion の至高のものではないと述べている<sup>43</sup>。

バラモン教やキリスト教との比較という事柄については本稿末で取り上げることとし、ここで確認しておきたい点の1つは、この時代すでに religion は諸「宗教」を包括する用語として使用されているという事である。そして第2に、religion の意味合いを巡る議論はなされていないという点である (後ほど論じるように、後の時代になると religion とタイ語のサーサナーの意味の相違が強調されてくる)。なおこの書簡のタイ語訳では religion の訳語にサーサナー (Sasana) が当てはめられているが、これは親王本人による訳文ではため、当時から religion とサーサナーの語が対応していたという証拠にはならない。とはいえ、religion とサーサナーの意味の違いについて特段論じていない点からすれば、暗黙のうちにそのような対応がなされていた可能性は高い。

このように religion とサーサナーを同義に用いる語り方は、仏教を語る際に宗教一般の概念を引き合いに出すラーマ6世王 (在位1910~1925年) の語り口や<sup>44</sup>、タイ社会のイデオロギーの基盤となったクン・ウィットマートラーの『タイの基盤 (ラック・タイ Lak Thai)』(1928) などにもみられる。さらには1932年に発布された憲法の国王規定やその解説書の中でも、religion とサーサナーが同義に用いられるようになる。ただしラーマ6世王時代やクン・ウィットマートラーの場合には、サーサナーで仏教を示すという用法も明確になっている (そのような用法は前近代のタイにおいても見られたと思われる)。

そして1950年代からの書籍では、このような religion とサーサナーの意味の重なりとずれが、意識化されるようになる。まず、『王立学士院版 タイ語辞典』(1950)の「サーサナー」の項目を事例に取り上げて見たい。そこでは、サーサナーの意味は、「人間が有している、体系性を持った、信仰・信条 (ラッティ latthi) や信念 (クワーム・チュア khuwamchua)。例えば、世界の生成と終末についての最高の真実とされる原理や、道徳としての善悪についての教えなど。またその信念における見解や戒律や教えに基づいた、儀礼的行為が付随する」<sup>45</sup>とされている。このように意味範囲の広いサーサナーの定義付けが行われるのは、実はそれほど簡単なことではなかった。サーサナーの語に包括的な意味を持たせるには、キリスト教やバラモン教<sup>46</sup>を信仰する委員との間でコンセンサスを得る必要があり、そのため何度も会合を持つことになったのだと、プラ

ヤー・アヌマーンラーチャトン<sup>47</sup>は述べている。その背景には、サーサナーとは、もともと宗教的な「教え」とりわけ仏教（プッタ・サーサナー Phutthasasana）を意味する言葉として使われてきた経緯があったからであろう。

また、そのプレイヤー・アヌマーンラーチャトン自身、『比較宗教』（1959）において、超越的な力や神への畏敬を意味する西洋の religion（この定義は、宗教学の専門書ではなく、*Everyman Encyclopedia* を参照している）には、仏教など他のサーサナーが入らないと述べている。また、英語では、敬虔なキリスト教を religious man と称するが、敬虔な仏教徒については moral man と道徳的観点に比重を置いて表現しているなど、religion と仏教に対する西洋人の視線のあり方の特異性を指摘している<sup>48</sup>。

その後、religion とサーサナーの異同をめぐる議論は多くの論者に引き継がれ、概ね2つの立場が現れた。1つは、religion にサーサナーを包含するタイプの議論。もう1つは逆にサーサナーに religion を包含するタイプの議論である。

前者（religion にサーサナーを包含）の議論は、ルアン・ウィットワーカーン『普遍宗教』（1951）に見られる。彼はタイ語のサーサナーが5つの構成要素（神聖な存在への信仰と儀礼、倫理・戒律、教祖の教え、教えを伝える宗教者集団、1つの教えへの忠誠心）からなるものだとし、教祖を欠くバラモン教や神道、ならびに宗教者集団を欠く儒教などは、サーサナーには入らないとする。他方 religion は、精霊や自然物、祖先などへの「信仰（ラッティ latthi）」のように、サーサナーではない対象をも含むより広い概念だとしている<sup>49</sup>。ただしこの著作では、「信仰（latthi）」など religion に入る対象も取り上げられているが、その書名にサーサナーを冠した「普遍宗教（Sasana Sakon）」という題名をつけている。この矛盾について彼は、題名のサーサナーは、religion（および哲学（philosophy）の一部も含む）の訳語として使用しているものだと弁解している<sup>50</sup>。

religion にサーサナーを包含する見解は、サティアン・パンタランシー『比較宗教』（1963）にもみられる。彼は西洋の religion には、唯一の創造神・道徳や法律となる教え・科学を越えた事柄・神への忠誠心といった意味が含まれており、これは仏教を基盤にしたサーサナーの特徴（縁起・覚り・合理性・自己努力）と相反すると主張している。ただし religion と仏教的なサーサナーの共通点に着目し、それを「サーサナー」と呼ぶとすれば、その構成要素は、神聖な存在への信仰と儀礼、倫理・戒律などの教え、教祖、教えを伝える宗教者集団になると述べている（先のルアン・ウィットワーカーンの定義とほぼ重なる）。また、このような共通項からなる「サーサナー」は、西洋の religion に包括されるものだと述べている<sup>51</sup>。

他方、後者（サーサナーに religion を包含）の見解は、次のような形になる。例えば、スチープ・ブンニャヌパーブは、『宗教史』（1963）のなかで、西洋の religion の基盤は神信仰にあるため、神信仰ではない仏教は、religion の定義からはみ出すと指摘する。そこでスチープは、「サーサナー」を religion や仏教を含む包括的な概念として設定し、そこには、人間が最高の存在を崇め信じ、心のよりどころとなる、道徳や理想や戒律などの教えといった、3つの特質があるのだと定義する。そしてそのような包括的サーサナーは、religion のような「有神論的サーサナー（Sasana thi chua nai ruang phracao）」と、仏教のような「無神論的サーサナー（Sasana thi mai chua nai ruang phracao）」からなると整理している<sup>52</sup>。このように「有神論的サーサナー」（religion）と

「無神論的サーサナー」(仏教など)が区分され、いずれも包括的概念としての「サーサナー」のなかに包含されるという手法は、後の宗教学関連の教科書の多くに引き継がれている<sup>53</sup>。

セーン・チャンタガーム『宗教学』(1986)でも、この見解に近い形で religion を下位概念に据えている。現代タイ仏教において、仏教の意味は5種類(覚りの状態、哲学、道徳、民間信仰、信仰に関わる国家制度)あり、このうち、religion に該当するのは民間信仰だけであると論じている<sup>54</sup>。ただしセーンは、ウェーバーに倣い、サーサナーの定義は研究の終着点で得られるものだとし、その定義を巧みに避け、代わりにサーサナーや religion に該当するいくつもの用語が、仏教(およびヒンドゥー教など)において使用されてきたことを強調している。例えば、パーリ語のサーサナーは、命令・メッセージ・教え・教義といった意味であるが、仏教の自称はサーサナーだけでなく、伝統的にはプローマチャン(phromacan 梵行)、タンマ(thamma 仏法)、タンマ・ウィナイ(thammawinai 法と律)なども使用されており、また水場・沐浴場・船着き場などを意味するティッタ(tittha)という古代インドで使われた用語も、宗教的教えといった意味を持っていると指摘している<sup>55</sup>。サーサナー以外の用語が使用されていたという指摘は、「宗教」概念や用語論におけるサーサナーという語への偏りに注意を促していると言えよう<sup>56</sup>。

以上のように、タイの宗教学関連の古典的書物においては、religion とサーサナーの意味合いを巡って、様々な定義がなされてきた。ただし、多様な使い分けを定めたとしても、その使用方法は一貫性に欠けている。例えば、歴史上の教祖の存在を構成要素の1つとしてサーサナーを定義したとしても、後の章では教祖を欠くヒンドゥー教や神道をも、サーサナーとして紹介するというようなことが行われている。

では、religion とサーサナーを巡るこの混乱をどう整理すればよいのだろうか。彼らの分類方式は、例えば次のようにそれぞれ狭義・中範囲・広義の3層の意味で捉えられ、文脈によって使い分けしていると、考えることはできないだろうか。つまり、以下のように整理できる。

◆ religion の定義

- 1、狭義 キリスト教的な唯一創造神への信仰や忠誠心
- 2、中範囲 神信仰一般(精霊信仰を含む)
- 3、広義 宗教一般(神信仰を基盤としない仏教も含む)

◆ サーサナーの定義

- 1、狭義 仏教
- 2、中範囲 神聖な存在への信仰と儀礼・教え・教祖・教えを伝える宗教者集団からなる制度化された実践
- 3、広義 宗教一般(religion(有神論的サーサナー)を含む)

このように複数の意味の階層それぞれを、religion ないしはサーサナーという同じ用語で呼び、しかも3つの religion いずれに対しても、サーサナーという訳語を当てはめ、文脈によって使い分けられていると考えられる。また、religion にサーサナーを包含する立場は、広義の religion に狭義・中範囲のサーサナーを含めているのであり、逆の場合には広義のサーサナーに狭義・中範囲の religion を含めているのである。このように、サーサナーは極めて多義的に使用されてきたと言えよう(なお厳密に言えば、広義の religion と広義のサーサナーが同じ内容を持っているのかどうかは定かではない)。

ここで生じている意味の複層化・複雑化を、いささか俗な比喻で表現すれば、「うどん」を「スパゲッティ」の一種と表現するのか、逆に「スパゲッティ」を「うどん」の一種と称するのかといった問題に近い。しかも、「うどん」の背後には「麺類（小麦粉以外の素材のものも含む）」につながる普遍化志向があり、「スパゲッティ」の背後には「パスタ（マカロニやラザニヤなど麺ではないものを含む）」への普遍化志向がある。そういったローカル性／普遍性の複層性を持つ概念が、さらに同種のローカル／普遍性を持つ概念と複雑に絡み合う状態、それが religion とサーサナーの接点で生じている事だと言えよう。

### 3-3 「宗教」の存在意義と準宗教的領域

以上、欧米の宗教学理論やその理論と連動した宗教の定義の影響をあまり被らなかつた、タイの宗教学関連の研究においては、独特なやり方で「宗教（religion あるいは、サーサナー）」なるものの定義の試みが行われてきたを論じてきた。しかし、これらの書籍に見られる「宗教」論の特徴としては、さらに2点ほど補足しなくてはいけないことがある。1つは、サーサナーの存在意義を肯定的に価値づけている点、もう1つはそのようなサーサナーの外縁に「ラッティ (latthi)」という準宗教的な領域が設定されている点である。

まず前者の点について簡単に触れておく。宗教学的関連の古典的な教科書の書籍において、サーサナーは客観性を保とうとする定義以外に、肯定的な価値づけもなされている。例えば、ブラヤー・アヌマーンラーチャトン『比較宗教』（1959）では、比較宗教（sasana priaphthiap）はサーサナーの格付けを行うものではないと述べる一方で、古代中国哲学者の言葉を引きつつ、心の広い人ならばどのような宗教（サーサナー）の教えの中にも同じ真実があることを理解できるはずだと説いている<sup>57</sup>。つまりどれが良い宗教（サーサナー）であるかを問わない学術的な態度をとることは、宗教そのものに人間にとっての共通価値があると見なすことと、矛盾しないと言うわけである。

同様にルアン・ウィットワータカーン『普遍宗教』（1951）では、サーサナーは人格の成長や人々を善に導く力を持っているだけでなく、文明を発展させる存在でもある。だからこそサーサナーの研究も重要なのだと述べている<sup>58</sup>。また、サティアン・パンタランシー『比較宗教』（1963）においても、比較宗教は、宗教の優劣を決めるのではなく、人間理解のための学、各自のサーサナーの色（特色）を知るようなものであると述べ、さらに慈悲の教えや実践のように、人々を結びつけて社会を作る作用があるから、人間はサーサナーを必要とするのだと述べている<sup>59</sup>。

こういった「宗教」を手放しで肯定的に評価する傾向は、日本の宗教学の教科書（少なくとも戦後の教科書）においてはあまり見られず、むしろ距離を取った表現がなされてきた。しかし、タイの場合には、これがストレートに表現されている。つまり、サーサナーとは、存在そのものに意義のある人間の営みなのであり、その影響は個々人の精神にとどまらず、社会の発展や形成にまで及ぶものとして位置づけられている。

ただし、次に述べるように、タイにおけるサーサナーの外縁には、一段価値の劣った「ラッティ」というものがあり、それとの差異においてサーサナーの価値づけも行われる点を見落としてはいけない。

例えば、先述のようにルアン・ウィットワータカーン『普遍宗教』（1951）は、サーサナー

とは5つの構成要素（神聖な存在への信仰と儀礼、倫理・戒律、教祖の教え、教えを伝える宗教者集団、1つの教えへの忠誠心）からなるものであり、そのいずれかを欠くバラモン教や儒教や神道、精霊や自然物崇拜や祖先崇拜は、サーサナーではなく、ラッティであると規定している<sup>60</sup>。また、サティアン・パンタランシーは、『比較宗教』（1971）において、ラッティとはサーサナーの始まりを意味するのだと述べている。したがって発生当初の仏教はゴータマのラッティであり、天理教、モルモン教、バハイ教は新興宗教（ラッティ・サーサナー・マイ latthi sasana mai）であると述べている<sup>61</sup>。

実際ラッティとは、制度化されたサーサナーになりきっていない信念（khuwamchua）などとともに使われる用語であり、またタイ語辞典などを見てみると、原義は「見解」とあり、使用事例として民族主義（ラッティ・チャートニヨム）、資本主義（ラッティ・トゥンニヨム）、社会主義（ラッティ・サンコムニヨム）など、世俗的な主義にも用いられている。宗派という意味合いを持つ場合もあるが、一般にはサーサナーの下位区分集団としての宗派には「ニカーイ（nikai 三蔵經典の下位区分であるニカーヤと同義）」が用いられるので、ラッティの場合には伝統的区分から独立した新派的な意味合いがある。つまりラッティとは、価値の高いサーサナーより、劣るか信頼性を欠く、新興のサーサナー、不完全なサーサナー、あるいは世俗の信条や見解、というニュアンスも持つことになる。

以上の点をまとめれば、サーサナーとは人間や社会に貢献する肯定的な価値を帯びた営みと位置づけられるとともに、それはサーサナーになりきれない残余のラッティとの差異において規定される現象でもあると言えよう<sup>62</sup>。

#### 4. まとめと課題

以上、タイにおける宗教学関連の制度化の歴史と、宗教学関連の古典的書籍における「宗教（サーサナー）」の意味について論じてきた。

宗教学関連の制度化の歴史においては、大学における制度化以前に、ラーマ4世王自身の護身・護国・護教の営みとして19世紀に比較宗教の学習が行われていたこと、そして王室と外国人研究者の学術サロンへの展開、さらに国民国家の学術基盤としての王立学士院の設立へと至る前史をとりあげた。そして第二次世界大戦後に始まる、大学における宗教学関連の研究・教育の制度化について解説を行った。大学における宗教学関連の研究と教育は、僧侶向けの仏教大学の中で始まった。著名な国立大学では、人文系の学部における個別の授業は設置されたが、講座等の制度化はなされなかった。その後1960年代後半から、人文・社会学部など、社会科学系の学問と接点を持つ形で宗教科（コース）などの制度化がなされ、1980年代以降は私立大学の認可も始まりキリスト教やイスラーム学を中心とする学部学科が形成され、国立大学においてもイスラーム学の講座等が設置されるようになった。またグローバル化や学際的な学問状況に対応する宗教学研究を行う学部なども設置されるようになった。このような歴史過程における特徴としては、欧米の宗教学の影響がほとんど見られない点、またインド留学経験者が比較的多く、インド経由の仏教学との接点がある点、社会科学の影響が広がっている点などが挙げられる。

さらにタイにおける宗教学関連の古典的書籍における「宗教」概念についても論じた。そこでは、欧米の宗教学理論や宗教の定義を取り込んでいない状況下で、「宗教」にあたるタイ語の「サー



サーナー」と英語の **religion** の意味の擦り合わせにおいて複雑な事態が生じていることを指摘した。また、サーナーは、人間や社会を発展させる価値ある存在として捉えられている半面、ラッティと呼ばれる準宗教の領域との差異においても規定される概念であることを取り上げた。

最後に、本稿で得られた知見を今後どのように広げていけるのかについて、いくつか課題を提示しておきたい。

まず制度化レベルにおいては、タイの各大学での宗教学関連の研究や教育がどのような内容でなされてきたのか、とりわけどのような研究テーマが重視されてきたのかについての確認が必要であろう。

このことは、サーナーのように歴史性と（仏教寄りの）積極的な価値を帯びた、生々しい意味を持つローカルな用語を、**religion** の訳語として用いることが、タイの社会や文化、諸研究にどのような影響をもたらしたのかという問いにも繋がる。またこのようなタイの状況が、ローカル性を比較的捨象した「宗教」という新語を **religion** に当てはめている日本のケースと、どう異なるのかといった研究にも発展しうるだろう。

また、近代タイ仏教の形成において、キリスト教だけでなくバラモン教（仏教形成に影響し、仏教に潜む非仏教的要素として表象される「宗教」との異同が重視されてきたこと（例えば、親王時代のラーマ4世王の書簡におけるキリスト教とバラモン教への蔑視や、王立学士院の「サーナー」の定義策定過程など）、さらにタイの宗教学関連の古典的書籍においてタイ国内のイスラーム教徒への言及が見当たらないことなども、さらに掘り下げる必要がある。これらの事象はサーナーと **religion** の交渉の過程に何らかの関わりを持つのであろうか。

またバラモン教の扱いにも見られるように、サーナーとラッティの線引きは流動的であり、そこには時代性が刻印されている可能性がある（少なくとも、ラーマ4世王やルアン・ウィットトワータカーンの書籍では、バラモン教をサーナーではなくラッティの範疇で捉えていた）。ここには世界宗教と民族宗教といった区分などの影響もあるかもしれないが、それとは別の区分原理も反映されているように思える。さらにこの点を敷衍すれば、タイの憲法規定にある「国王は仏教徒であり、宗教（サーナー）の至高の擁護者である」という文言の意味も、サーナーの意味の複合性、ラッティとの差異といった点から読み込むことが可能ではないだろうか。

---

## 註

- 1 および科研費の基盤研究C「近現代タイにおける非政教分離的な宗教行政に関する総合的研究」課題番号 22520064 の成果の一部でもある。
- 2 Gregory D. Alles ed., *Religious Studies*. Routledge, London and New York, 2007, pp.139-158.
- 3 17世紀後半のナーラーイ王時代にすでにタイはカトリック教会の宣教師達と出会っている。フランスとの接点を持ちたいナーラーイ王は、カトリックの布教に対して寛容な政策をとろうとするが、これに反対する国内勢力の台頭もあり、カトリックとフランスの勢力はタイから追い出されていった。当時はペルシャ系の人物などもタイ王室貿易に関わっており、イスラームの存在も王都周辺では知られていたはずである。何らかの通文化的な「宗教概念」のようなものが形成されていた可能性はあるが、それぞれの立場で意思疎通のための用語を模索しているような段階だったのではないだろうか。おそらく、後の時代のように **religion** の訳語と意味解釈にまつわる議論や、それに基づく比較宗教研究がなされたとはいえないだろう。

- 4 石井米雄『上座部仏教の政治社会学』創文社、1975年、260-284頁。
- 5 同書、145-194頁。
- 6 The Siam Society (<http://www.siam-society.org/>, 2012/12/31)、森幹男「プレーヤー・アヌマーンラーチャトン博士 人と作品」プレーヤー・アヌマーンラーチャトン(森幹男編訳)『タイ民衆生活誌(1) 祭りと信仰』勁草書房、1987年、iv頁。ちなみにジャーナル第1号には、タイの民法や刑法の起草に関わった政尾藤吉も寄稿している。
- 7 石井、前掲書、285-293頁。
- 8 Rachabanditsathan, the Royal Institute (<http://www.royin.go.th/th/home/>, 2012/12/31)
- 9 Khun Wicitmatra, *Lak Thai*, Hang hun suwan camkat Krungthep, Thailand, 2471. (クン・ウィチットマトラー『タイの基盤』ハーンフーンズワン社、仏暦2471年[西暦1928年])、バンコク、タイ。)
- 10 その他に、後述のアヌマーンラーチャトンの『比較宗教』や、ルアン・ウィチットワータカーンの『普遍宗教』も古典的著作として参照されている。また『宗教の普遍性 (Sakon Sasana)』(1962)を著したプラ・プロムニーもここに加えるべきだが、資料が入手できなかったため触れることができなかった。
- 11 Mulanithi Mahamakut Rachawithayalai, *Prawathi lae Phongan: Acan Suchip Punnyanuphap*, Krungthep, 2543. (マハー・マクット仏教大学財団『来歴と業績 スチープ・ブンニャヌパーブ先生』バンコク、タイ、仏暦2543年[西暦2000年]。)
- 12 *Laksut Sasanasat Bandit, Sakawicha Sasana lae Prachaya, Phakwicha Sasanasat, Khana Sasana lae Prachaya, Mahawithayalai Mahamakut Rachawithayalai*, 2549, pp.1-2. (「マハー・マクット仏教大学 宗教・哲学部宗教学科 宗教・哲学コース 仏暦2549年度[西暦2006年度] 宗教学士カリキュラム」、1-2頁。) *Laksut Sasanasat Bandit, Sakawicha Sasana Priapthiap, Phakwicha Sasanasat, Khana Sasana lae Prachaya, Mahawithayalai Mahamakut Rachawithayalai*, 2549, pp.1-2. (「マハー・マクット仏教大学 宗教・哲学部宗教学科 比較宗教コース 仏暦2549年度[西暦2006年度] 宗教学士カリキュラム」、1-2頁。)
- 13 *ibid.*, pp.32-37.
- 14 *ibid.*, pp.3-4.
- 15 タイ人ムスリムの留学は中東やマレーシアなどが多いが、インドのウツタル・プラデーシュ州にあるアリーガル・ムスリム大学にも、タイのムスリム研究者やムスリム政治家など著名な人物が多く留学している。Caran Malulim, “Aligarh Muslim University: Ik Thang Luak Nung khong Naksuksa Thai (1)”, *Matichon Sutsapda*, Krungthep, Wan thi 7-13 Thanwakhom, 2555, p.40. (ジャラン・マルーリム「アリーガル・ムスリム大学：タイ学生のもう一つの選択(1)」『週間マティション』バンコク、タイ、仏暦2555年[西暦2012年]12月7日-13日、40頁。)
- 16 “100 pi Sastraacan Sathian Phantharangi Nakwichakan Sasana lae Nankangsuphim”, *Post Today*, Krungthep, wan thi 7 Mithunayon, 2554. (「宗教研究者・新聞研究者 サティアン・パンタランシー教授100年」『ポスト・トゥデー』バンコク、タイ、仏暦2554年[2011年]6月7日号。)
- 17 *Laksut Phutthasat Bandit, Sakawicha Sasana, Phakwicha Sasana lae Prachaya, Khana Phutthasat, Mahawithayalai Mahaculalongkorn Rachawithayalai* 2550. pp.1-12. (「マハー・チュラーロンコーン仏教大学 仏教学部宗教・哲学科 宗教科コース 仏教学士仏暦2550年度[西暦2007年度]カリキュラム」、1-12頁。)
- 18 森、前掲書、i-viii頁、プレーヤー・アヌマーンラーチャトン『回想のタイ 回想の生涯 上』森幹男訳 勁草書房、1986年、219-300頁。
- 19 Phraya Anumanrachathon, *Sasana Priapthiap*, Rachabanditsathan, Krungthep, 2502, p11. (プレーヤー・アヌマーンラーチャトン『比較宗教』王立学士院、バンコク、タイ、仏暦2502年[西暦1959年]、11頁。)
- 20 セーンについては、文献による来歴等の情報が入手できず、ウィキペディア [<http://th.wikipedia.org/wiki>]の情報に依拠している。そのため情報の信頼性に欠ける点に注意を払っていただきたい。
- 21 *Laksut Sinlapasat Bandhit, Sakhawicha Prachaya lae Sasana, Phakwicha Prachaya lae Sasana, Khana Manusat, Mahawithayalai Kasetsat*, 2552. (「カセサート大学 人文学部哲学・宗教学科 哲

- 
- 学・宗教コース、教養学士 仏暦 2552 年度 [西暦 2009 年度]カリキュラム。)
- 22 *Laksut Sinlapasat Mahabandhit, Sakhawicha Prachaya lae Sasana, Phakwicha Prachaya lae Sasana, Khana Manusat, Mahawithayalai Kasetsat*, 2553. (「カセサート大学 人文学部哲学・宗教学科 哲学・宗教コース、教養学修士 仏暦 2553 年度 [西暦 2010 年度]カリキュラム。)
- 23 Faculty of Humanities and Social Sciences, Prince of Songkla University, ([http://huso.pn.psu.ac.th/main/Philo\\_Dept/](http://huso.pn.psu.ac.th/main/Philo_Dept/), 2012/12/31)
- 24 Sathianphong Wannapok, “Botkwam Phiset: Samanen Sathianphong Wannapok,” *Matichon Sutsapda*, Krungthep, Wan thi 4-10 Mokkarakhom 2556, p.67. (サティアンボン・ワンナポック「沙弥サティアンボン・ワンナポック」『週間マティション』 バンコク、タイ、仏暦 2556 年[西暦 2013 年]1 月 4 日-10 日、67 頁。)
- 25 *Laksut Sinlapasat Mahabandhit, Sakhawicha Sasana Priapthiap, Khana Sangkhomsat lae Manusat, Mahawithayalai Mahidon*, 2542. (マヒドン大学社会科学・人文学部 比較宗教コース、教養学修士 仏暦 2542 年度 [1999 年度]カリキュラム。)
- 26 College of Islamic Studies, Prince of Songkla University, (<http://www.cis.psu.ac.th/th/index.php/>, 2012/12/31)
- 27 Yala Islamic University, (<http://www.yiu.ac.th/th/>, 2012/12/31)
- 28 Payap University, ([http://info.payap.ac.th/info/curriculum/G\\_Thai.asp](http://info.payap.ac.th/info/curriculum/G_Thai.asp), 2012/12/31)
- 29 Graduate School of Philosophy and Religion, Assumption University, (<http://www.philo-religion.au.edu/>, 2012/12/31)
- 30 設立経緯の詳細について十分な情報を筆者は持っていないが、外部財団の支援を得ていること、タイ国内の 2 宗派の仏教大学の僧侶が共同で学べる場の設置を目的にしていたことなどを伺っている。
- 31 The College of Religious Studies, Mahidol University, (<http://www.crs.mahidol.ac.th/thai/about.htm>, 2012/12/31)
- 32 なお組織名が, khana (学部)ではなく、witthayalai (一般にはカレッジや専門学校を意味する語)となっている理由については調査を行っていないため不明である。もしかすると、外部資金で運営されるなどの理由により、学部から独立した機関であることなど、法制度上の規定があるのかもしれない。本稿ではこの点を踏まえ、witthayalai を「学部」ではなく「部」と訳を充てておいた。
- 33 Gregory D. Alles ed., *op.cit.*, p.30.
- 34 Luang Wicitwathakan, *Sanasakon lem 1, Sammakgan*, Luk So. Thammaphakdi, Krungthep, 2494. (ルアン・ウィットワタカーン『普遍宗教 第 1 巻』、ソー・タンマパクテディー子息事務所、バンコク、タイ、仏暦 2494 年 [西暦 1951 年])。なお彼はドイツ宗教研究を高く評価しており、その文献が参照できない点について読者に注意を促している。
- 35 前者のルイスはアルコールリック・アノニマスのメンバー、後者のエストゥリンはユニテリアンの牧師で、マンチェスター大学の学長。
- 36 Phraya Anumanrachathon, *op.cit.*, p.(12).
- 37 Hume がどのような研究者であるかについて筆者はまだ把握できてない。
- 38 Suichip Punnyanuphap, *Prawatisat Sasana*, Hanghansuwan Camkat, Krungthep, 2506, pp.4-26. (スチープ・プンニャヌパープ『宗教史』ハーンハンスワン社、バンコク、タイ、仏暦 2506 [西暦 1963 年]、4-26 頁。)
- 39 Sathian Phantharangsi, *Sasana Priapthiap*, Phraephithaya, Krungthep, 2506, pp.8-9. (サティアン・パンタランシー『比較宗教』プレーピッタヤー社、バンコク、タイ、仏暦 2506 [西暦 1963 年]、8-9 頁。)
- 40 宗教学者を中心とした科研研究会 (2012 年) の場で発表した際にも、情報提供はどなたからもなかった。
- 41 Saeng Canthagam, *Sanasasat*, Borisat Rongphim Thaiwatanaphanit Camkat, Krungthep, 2531. (セーン・ジャンタガム『宗教学 The Science of Religion』、タイワッタナーパニット社、バンコク、タイ、仏暦 2531 年[1988 年])。セーンは、むしろサーサナ・ウィッタヤー (Sasana witthaya)、英語で Religiology という言葉を使いたかったのだが、あまり知られてない語用なので取りやめ

- ている。興味深いことに、日本の著名な宗教学者岸本英夫は、その著書『宗教学』(1961) 1 頁において、「宗教学」の英語表記として *Religiology* という新語をつくってみてはどうかと、同種の意見を述べている。
- 42 もっともこういった定義への注目の仕方は日本的なのかもしれないが。
- 43 *Sanna lae Khamplae, Phraracha Hathalaekha, Phrabatsomdet Phracomklaoyuhua, Krungthep, 2507, pp.5-9.* (『複写と訳 プラバート・ソムデット・プラチョームクラオユーファ (ラーマ 4 世) 王 御親筆』)、バンコク、タイ、仏暦 2507 年 [西暦 1959 年]、5-9 頁。)
- 44 石井、前掲書、285-293 頁。
- 45 “Sasana” *Phocananukrom Chabap Rachabanditsathan, 2493.* 「宗教 (Sasana)」『王立学士院版 タイ語辞典』仏暦 2493 年 [西暦 1950 年]
- 46 これが王室儀礼に携わる王室バラモンを意味するのか、それとも民間バラモン儀礼をおこなう職能者なのか、あるいはタイ在住のヒンドゥー教徒を意味するのかは定かでない。
- 47 Phraya Anumanrachathon, *op.cit.*, p.12.
- 48 *ibid.*, p.12.
- 49 Luang Wicitwathakan, *op.cit.*, pp.1-6.
- 50 *ibid.*, p.10.
- 51 Sathian, *op.cit.*, pp.8-11.
- 52 Suichip, *op.cit.*, pp.10-12.
- 53 Sucitra Romrun, *Sasana Priapthiap, Duwangkaeo, Krungthep, 2527, p.1.* (スチットラー・ロムルーン『比較宗教』、ドワンケーオ社、バンコク、タイ、仏暦 2527 年 (西暦 1984 年)、1 頁。)、Sumet Methawithayakun, *Sasana Priapthiap, Odiansato, Krungthep, 2532.* (スメート・メーターウィタヤクン『比較宗教』、オーディアンサト社、バンコク、タイ、仏暦 2532 年 (西暦 1989 年)、10 頁。)、Hun Dokbua, *Sasana Priapthiap, Buraphasan Camkat, Krungthep, 2539.* (フーン・ドクブア『比較宗教』、ブーラパーサン社、バンコク、タイ、仏暦 2539 年 (西暦 1996 年)、2 頁。) これら 3 冊のテキストでは、*theism* (タイ語で、テーワニヨム *thewaniyom*) のサーサナーと *atheism* (タイ語で、アテーワニヨム *athewaniyom*) のサーサナーとして区分されている。
- 54 *ibid.*, pp.13-15.
- 55 タイ語の「プローマチャン」「タンマ」「タンマ・ウィナイ」「ティッタ」は、サンスクリット語の「ブラフマチャリヤ」「ダルマ」「ダルマ・ヴィナヤ」「ティーラタ」に対応する。なお仏教以外の教えを意味する「外道」は、ティッタの訳語である。
- 56 Saeng, *op.cit.*, pp.1-10. セーンのこの指摘は重要である。サーサナーという用語の使用文脈と意味を遡っても、タイの宗教概念のルーツに辿りつけるとは限らないこと、前近代社会のタイにおける「宗教」的なものの意味合いや布置連関は、現在のものと大きく異なる可能性を示唆している。
- 57 Phraya Anumanrachathon, *op.cit.*, p.15.
- 58 Luang Wicitwathakan, *op.cit.*, pp.11-12.
- 59 Sathian, *op.cit.*, pp.1-5.
- 60 Luang Wicitwathakan, *op.cit.*, pp.1-6.
- 61 Sathian, *op.cit.*, p.12, p.42.
- 62 微妙にニュアンスを異にするが、宗教的な領域についての似たような区分は他国にも見られる。例えばベトナムでは、国家の管理下にある制度化された「宗教」と、教義の体系性や組織の制度化が完備していない「信仰」、および、制限や禁止の対象となる「迷信異端」といった区分がある。日本においても、明治時代に文部省所轄の「公認」された宗教と内務省所轄の「類似宗教」の区分があり、また昭和 15 年の宗教団体法には「宗教団体」と「宗教結社」の区分がある。